

contents

- ・ 病院長新年のご挨拶
- ・ 第4回杏林大学医学部附属病院医療連携フォーラムご報告
- ・ 診療科紹介
脳神経外科、形成外科・美容外科、小児科
- ・ 小児病棟リニューアル移転
- ・ 年末年始の診療記録



編集：杏林大学医学部附属病院
〒181-8611 三鷹市新川 6-20-2
Tel. 0422-47-5511（代表）

杏林大学病院



新年のご挨拶

病院長 市村 正一



皆様、新年おめでとうございます。令和2年が始まりましたが、皆様には健やかに新年をお迎えしたこととお喜び申し上げます。本年は、オリンピック・パラリンピックの年でもあります。病院としてもできるだけ都や国に協力する予定でおります。

当院は昨年、「医療被ばく低減施設」に認定され、最新の放射線治療機器も導入しました。また心臓弁膜症に対して低侵襲のTAVIを開始いたしました。これも皆様のお蔭と心より御礼申し上げます。

この年初からは改築した小児病棟が稼働しておりますし、さらには患者さんの待ち時間対策としてモバイル端末を利用した呼び出しサービスを一部診療科から開始いたしました。さらに、長年要望の強かった産科病棟の改築やPETの導入などを計画しております。今後も患者さんが主体となる医療を提供し、患者さんに信頼いただけるよう努力いたしますので、皆様のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。本年も皆様にとりまして幸多い年になりますよう祈念しております。

◆第4回杏林大学医学部附属病院 医療連携フォーラム ご報告

近隣医療機関等との顔が見える連携をさらに深めるため、昨年11月14日（木）に第4回杏林大学医学部附属病院医療連携フォーラムを開催しました。

今回も病院内外から合わせて160名を超えるご参加をいただき、大変盛況のうちに会を終えることができました。前回の参加者からのご要望にお応えする形で院内見学ツアーを2コース（放射線部、顎口腔外科）に拡充し、今年度着任教授（糖尿病・内分泌・代謝内科 安田和基教授）による、当該科を紹介する講演を行いました。また、くぼかわ内科医院院長の窪川良廣先生には「杏林大学病院の地域医療に望む」をテーマに、三鷹市の地域医療・在宅医療への思いを熱く語っていただきました。

その後、外来棟6階日比谷松本楼に会場を移して行われた情報交換会にも多くの先生方にご参加いただき、院内からの参加者にとっても大変得るところの大きいフォーラムとなりました。

当日いただいた様々なご意見をふまえて、患者支援センターの今後の活動につなげていきたいと思っております。

患者支援センター長 塩川芳昭

【プログラム】

- ・ 18:00-18:45 病院施設見学 放射線部、顎口腔外科（希望者対象）
- ・ 19:00-20:00 第1部 杏林大学医学部附属病院 大学院講堂
挨拶：病院長 市村正一、三鷹市医師会長 内原正勝氏、患者支援センター紹介：患者支援センター長 塩川芳昭
講演「糖尿病・内分泌・代謝内科：大学病院としての取り組み」教授 安田和基
講演「杏林大学医学部附属病院の地域連携に望む」くぼかわ内科医院 院長 窪川良廣氏
- ・ 20:00-21:00 第2部 情報交換会 外来棟6階日比谷松本楼



◆ 脳神経外科



診療科長 塩川芳昭

当科は脳血管障害（塩川）、脳腫瘍（永根基雄教授）、頭部外傷を中心に、関連する脳卒中科、脳神経内科、放射線科、救急科、リハビリテーション科などと連携して多摩地区 400 万人の最後の砦として診療にあたっています。脳血管内治療、覚醒下手術、神経内視鏡手術、化学療法など現在の脳神経外科に求められるほぼあらゆる治療を安全、確実に実施してまいりました。特に急性期脳血管障害（脳卒中）は、2006 年、ATT（後の救急総合診療科）と合わせて開設された脳卒中センターにて発症直後より迅速かつ非選択的に対応できる体制が実態として継続・稼動しており、2014 年の平野照之教授着任を機に脳卒中科の開講に発展し現在に至っています。

去る 2019 年 12 月に永根教授が日本脳腫瘍学会学術集会を開催し、今年 3 月には塩川が「STROKE 2020」として日本脳卒中学会を担当（平野教授が副会長）するなど、これら二領域において当科は全国屈指の診療施設として広く認められているところです。地域の医療機関の皆様には今までのご支援に改めて感謝いたしますとともに、引き続き今後もよろしくお願い申しあげる次第です。

◆ 形成外科・美容外科



診療科長 多久嶋亮彦

当科は先天異常をはじめ、挫創、熱傷、顔面骨骨折などの外傷、皮膚・軟部組織腫瘍、悪性腫瘍切除後の再建、褥瘡、難治性潰瘍、そして美容医療にいたるまで非常に幅広い領域の治療を担当しています。そのため、多岐にわたる専門的知識や手技を必要としますが、当科では国内最大規模となる 12 名の日本形成外科学会認定専門医が在籍しており、それぞれの専門分野を生かしながら、連携して患者さんに最善の治療を提供しております。

特徴としては、陳旧性顔面神経麻痺に対する再建、重症下肢虚血や血管腫・血管奇形の治療に関して全国トップクラスの治療実績を有しており、より専門的な治療が可能となっています。また、近隣の医療機関との連携も大切にしており、皮膚科のクリニックからは皮膚腫瘍、眼科のクリニックからは眼瞼下垂症を多く紹介いただいております。その他、顔面骨骨折、手の外傷、顔面挫創など比較的緊急性を要する疾患に関しても、常に近隣の医療機関の要望にお応えできるよう 24 時間体制で診療にあたっています。

◆ 小児科



診療科長 楊 國昌

当科の初診は、新生児から 15 歳までのこどもにおける全ての分野の内科的疾患を診療の対象としています。また、継続的フォローが必要な慢性疾患の患者さんについては、20 歳を超えても診療しています。当科の診療は、一般小児部門と総合周産期母子医療センター新生児集中治療部門（NICU）の 2 部門で行われていますが、NICU 退院後の患者さんについては両部門の協力の下で長期フォローアップを行っています。

一般小児部門については、腎臓、膠原病、血液・腫瘍、循環器、アレルギー、神経、内分泌、呼吸器についての専門チームが、それぞれの領域について、外来および入院診療を行っています。また、救急患者さんに対しては、3 次救急を含めた 24 時間対応の体制をとっています。日中の紹介患者さんについても、至急の処置が必要な場合は代表電話番号から救急担当医へ直結する連絡システムで、迅速な対応を行っています。

第 1 病棟 4 階の小児病棟は令和 2 年 1 月に新病棟になりました。お子さんや親御さんの不安を軽減すべく、やさしい環境の病棟作りをテーマに新築致しました。NICU 部門は、多摩地区の新生児・未熟児医療の中心的役割を担っています。当院産科、小児外科と連携してハイリスク妊婦を積極的に受け入れ、出生前の胎児管理、出生後の新生児治療・管理を行っています。当科は、今後も多摩地区唯一の大学病院本院の小児科として、患者さんの視点に立った医療を心がけてまいります。

■ 武蔵野の杜をコンセプトに小児病棟をリニューアル移転

より快適な入院・診療環境を患者さんに提供するため、小児病棟は第 1 病棟 4 階にリニューアル移転し、35 床で 1 月 4 日から稼動しています。

「武蔵野の杜にある病院」をコンセプトにしたデザインは、患者さんや保護者の方々の不安を少しでも和らげることを第一にしています。プレイルームやフロアは木を生かしたデザインを取り入れ、壁や天井にはパステルカラーを基調としたかわいらしい動物たちが描かれています。また、診察室の扉の絵や 4 人部屋のベッド周りの壁の色使いなども心地よさを大切にしています。さらに、病棟内の処置室やトイレの数を増やしたり、診察を行う外来棟とフロアを直結させることで利便性を高めました。



年々年始の診療記録

2019 年 12 月 28 日～
2020 年 1 月 4 日まで

患者数（人）	1,502（内 3 次救急 60 人）
救急車台数	168 台（内 3 次救急 50 台）

（内訳 1・2 次のみ）

診療科	救急総合	内科系	外科系	精神神経科
患者数	552	95	20	8
診療科	小児科	小児外科	脳神経外科	心臓血管外科
患者数	234	3	55	4
診療科	整形外科	皮膚科	形成外科	泌尿器科
患者数	110	24	76	36
診療科	眼科	耳鼻咽喉科	産科婦人科	SCU
患者数	102	90	13	20